4-2 派遣事業
（教員編）

北海道・ハワイ州高校生交換留学促進事業 引率報告書

北海道札幌東高等学校教諭

1　引率教員応募のきっかけ

引率教員に応募したきっかけは、これまでの海外研修引率経験や海外滞在経験を、本校生徒に限らず、北海道内の高校生に指導・還元できると考えたことです。私はこれまで、イギリスやカナダ、ニュージーランドでの海外語学研修や、北海道・アルバータ州高校生交換留学事業に携わってきました。その中で、日本人高校生と現地生徒・ホストファミリーとの関係づくりや、現地生活における様々な課題に幾度となく対処してきました。

こうした問題の背景には、「海外の人々は明るくポジティブで、日本人に好意的に接してくれるはずだ」という期待が、生徒や保護者の間に少なからず存在していることがあると感じています。しかし実際には、自ら進んでホストファミリーを引き受けてくれる家庭もあれば、現地教員からの依頼を受けて引き受けている家庭もあります。こうした現実も、日本人高校生は理解しておく必要があると考えました。

マッチングが常に円滑に進むとは限らないこと、そして英語力向上の契機は、現地で問題が生じた際に自らどのように行動し、どのように解決へと導いたかというプロセスにあることを、オンライン会議や新千歳空港で直接お会いした保護者の方々にもお伝えしなければならない―そのような使命感を抱き、引率教員に応募しました。

2　ワイパフ高校の授業プログラムと現地高校生の雰囲気

ワイパフ高校での10日間のプログラムは、日本語教員のスミス先生により、個別にスケジュールが作成され、ワイパフ高校生と北海道高校生が十分に交流できるよう工夫されていました。日本語の授業をはじめ、音楽のウクレレ練習、美術の絵画制作、放課後のクラブ活動（テニス）など、自然に会話が生まれる機会が多く設けられていました。

当初は互いに遠慮がちで会話もぎこちない様子でしたが、１時間も経たないうちに打ち解け、授業終了時にはインスタグラムのアカウントを交換する姿も見られました。ワイパフ高校生の約70％は、フィリピンにルーツをもつ家庭の出身であり、家族や友人を大切にする気質が強いと伺いました。授業道具や机・椅子の準備を教員の指示を待たずに自ら行い、北海道高校生に差し出すなど、随所に細やかな配慮が見受けられました。

また、ワイパフ高校生は人懐っこく穏やかで、北海道高校生の拙い英語にも辛抱強く耳を傾け、誠実に応じてくれていました。こうした環境は、北海道高校生が英語で交流するうえで非常に適していると確信しました。

生徒のみならず、教職員も大変親切でした。授業見学の場所が分からず、屋外のベンチで過ごしていた際には、現地スタッフが声をかけてくださり、携帯電話の日本語翻訳機能を使って、「ここは寒いので図書館で休んでください」と気遣ってくださいました。また、スペイン語の授業やテニス部の練習後には、教員やコーチがささやかなお菓子でもてなしてくださり、終始温かい雰囲気の中で過ごすことができました。

3　北海道高校生の変化

今回の研修を通して改めて感じたのは、重要なことは英語力そのものよりも「コミュニケーション力」であるということです。失敗を恐れず、現地高校生の輪に入っていく生徒ほど早く打ち解け、より深い交流を築いているように見受けられました。

ハワイ到着後の週末を経た月曜日には、不安や疲れの表情が見られ、涙ぐむ生徒もいました。しかし、月曜日１時間目のオリエンテーションで、スミス先生や日本語教員の後藤先生から「苦労があってこその語学研修。楽しいだけでは旅行に過ぎず、英語力は伸びない」、「ホストファミリーと最初から良好な関係であるとは限らない。自ら改善に向けて動くことが大切だ」といった励ましの言葉をいただきました。

日を追うごとに北海道高校生の表情は和らぎ、現地高校生と拳を合わせて挨拶を交わしたり、一緒に踊る様子をソーシャルメディアに投稿したりする姿が多く見られるようになりました。現地生活に溶け込みつつある様子がうかがえ、日本帰国後には「ワイパフ高校生のホストファミリーをしてみたい」と話す生徒もおり、本事業の目的は十分に達成されたと感じております。

４　本事業を長く続けるために

今回ワイパフ高校を訪問して感じたのは、同校が北海道のみならず、広島県の高校とも交流を行っており、ホストファミリーの確保に大変苦労されているという現状でした。スミス先生は授業のたびに広島のホストファミリーの受入れを呼びかけておられました。今回で３回目の受入れとなる家庭や、日本語の授業を履修していないにもかかわらず、引き受けてくれた生徒もおり、私たち北海道側としては深く感謝すべきであると強く感じました。

私たちにできることは、現地高校生を受け入れる学校を少しでも増やすことだと考えます。これまでは、登別明日中等教育学校と札幌国際情報高等学校の２校ですが、函館や旭川にもホストスクールがあってよいのではないかと思います。そのためには、学校全体での受入体制の整備や、６～７名程度のホストファミリー確保といった課題を乗り越える必要があります。

引率教員としても、現地での経験を勤務校内で共有するにとどまらず、道教委の国際交流関連の訪問依頼があれば積極的に引き受け、一人でも多くの海外留学生やスタッフを北海道に招聘できるよう努めていく必要があると強く感じました。

最後になりますが、本事業が順調に進んでいるのは、道教委国際交流係の皆様、ワイパフ高校のスミス先生、岸先生をはじめとする関係者の皆様のお力添えによるものです。心より感謝申し上げます。また、若き北海道高校生がこの留学をどのような高校生活の転機として受け止めたのか、本報告書を通して知ることを楽しみにしております。

５　受入事業

ハワイ州からの留学生受入事業に係る報告書

北海道札幌国際情報高等学校　教諭（受入担当）

１　本校の実態

本校はこれまで、海外からの視察の受入れや、留学生の中・長・短期滞在の受入れを継続的に行ってきた実績がある。近年、こうした国際交流の取組も再開され、生徒はさまざまな国からの留学生との交流の機会を楽しみにしている。また、今年度まで２学年の見学旅行先をハワイとしており、現地高校との交流を実施してきたことから、ハワイの文化や社会について一定の理解を有する生徒も多い。

２　受入れに向けた事前準備

受入期間は２月１日（日）からであり、推薦入試実施日（２10日（火））や本校の学年末考査（２月 17 日（火））への影響に配慮しながら、充実した滞在となるように準備を行った。登校初日からいきなりの悪天候により臨時休校となったものの、翌日の登校初日では、昼休みに吹奏楽部の協力による歓迎会を行ったり、日本文化（なぎなた部とお琴の会による体験など）の授業を盛大に実施したりすることができた。

また、本校の特徴である「多学科集合型」を体感してもらえるよう、昨年度と同様に国際文化科の英語、理数工学科の実習、グローバルビジネス科のプレゼンテーションなどの多様な形態の授業を設定した。そのほか、家庭科による日本料理の実習や、茶道の体験、理科による「北海道の生きもの」の授業や数学科の授業なども新たに設定し、本校の教育活動を通して、留学生が日本らしさや北海道らしさを感じられるように工夫した。

３　本校生徒の様子

ハワイの生徒の明るさや穏やかさの影響か、本校生徒にも笑顔で積極的に交流をしようとする姿が各所にみられた。受入れに協力してくれた部活動の生徒たちは、ハワイの生徒たちが日本文化を興味深く学ぶ様子をみて、改めて「日本や北海道の良さ」を再認識していた。

また、英語を用いたプレゼンテーションでは、初めはお互い緊張していたものの、すぐに打ち解け、本校生徒にとって、日常の学習で培った語学によるコミュニケーション力を発揮するよい機会となった。

日本料理の実習や茶道の体験等については、昨年度と同様、３年生サポーターの協力を得て実施した。ホームステイを引き受けた１～２年生の生徒と連携し、先輩として留学生と在校生のパイプ役を見事に果たしてくれた。

４　留学生の様子

留学生は、日本や日本文化に興味関心があり、日本語を使うことを意識しながら過ごしていた。北海道到着時は悪天候で日程が不安定となり、夜分遅くの到着となったが、翌日にはホームステイ先での生活を始めるという過密日程にめげずに、元気いっぱいに過ごしていた。また、交流した生徒たちにお土産を渡すなど、細やかな気遣いが多く見られ、生徒たちから感謝される場面も多かった。帰国時には日本語がさらに上達したようであった。

５　ホームステイ

今回のホストファミリーは１・２年生に分散した。本校は留学生のホームステイ受入れに理解がある家庭が多いが、新規で学校独自の海外研修事業がほぼ同時期に実施されたこともあり、ホームステイ先を募集しても、候補となる家庭や生徒が上記事業の参加と重複してしまい、本事業への応募が少なく、その確保に苦労した。さらに、カナダ・アルバータ州の

交換留学生（１名）の受入開始時期が重複し、元々AFS 年間生（１名）などが留学生として在校するなど、各家庭との連携・協力体制の難しさを痛感した。結果として、ホームステイ受入れの承諾が全て得られるにはかなり時間がかかった。しかし、調整に時間がかかった分、ホストファミリーのあたたかいもてなしで留学生が嬉しそうに日々の生活の話をしている様子を見た際は、担当として非常に感慨深かった。

また、雪まつり見学が企画・実施された際は、ホームステイ受入生徒たちも現地で行動を共にするよう調整を行った。サポートしてくれた３年生も含めて、ハワイの生徒たちは「北海道の冬」を満喫することができた。そのほか、ホストファミリーとの時間においては、小樽に観光で訪問したり、回転寿司で楽しんだり、神社にお参り体験したり、犬カフェに行ったりするなど、それぞれの時間を楽しんでいたようようである。

６　全体を通して

一週間ではあったが、本校にとって大変充実した機会となった。日本に対する興味関心が高いハワイの高校生との交流は、本校生徒によい影響を与えてくれた。ホームステイを受け入れた家庭や授業で交流があった生徒だけではなく、学校全体に明るい雰囲気があふれ、語学をはじめとする諸外国に関する学習へのモチベーションを高める機会となった。

海外に住む同年代の生徒との時間の共有を通して、また、帰国時の別れの悲しさや寂しさを感じながら、国や文化・言語を越えた国際交流の価値を、生徒たちの心に問いかけるような本事業に携わることができ、心から感謝を申し上げる。本事業を通して、生徒たちは「多文化共生」やこれからの我が国の在り方を思考する意識を高めることができたため、今後も引き続き、「Well-being に基づいた、より良い人生」を模索できる人材育成に努めていきたい。

令和７年度（2025 年度）北海道・ハワイ州高校生交換留学促進事業

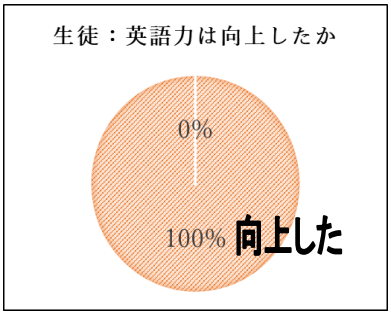
―アンケート結果から見える事業効果―

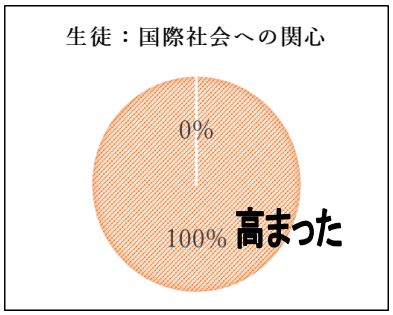
（北海道教育庁学校教育局高校教育課）

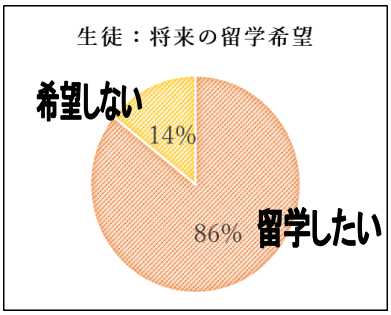
北海道側留学生の派遣事業

■ **事業効果**

参加生徒全員が、「英語力の向上を実感した」、「国際社会への関心が高まった」と感じ、多くの生徒が「将来また留学したい」と回答。







■ **北海道側留学生の感想**

・留学が多くの支えの上に成り立っていたことを実感した。約２週間の経験を通して、宗教や食習慣、時間感覚など、これまで日本で当たり前だと思っていたことが、海外では当たり前ではないと気付かされた。ワイパフ高校での授業やホストスチューデントとの交流に対する不安を乗り越え、最後には「日本に帰りたくない」と思えるほど充実した時間を過ごすことができた。

・「どうすればコミュニケーションをうまくとり、たくさん友だちを作れるか」をテーマに、留学への緊張を乗り越え、主体的なコミュニケーションを常に心掛けた。相手の反応を気にしすぎず、勇気を出して話しかけることの大切さを学んだ。「笑顔は世界共通のコミュニケーション方法」ということを実感し、短期間で多くの友人を得ることができた。

・食文化の違いは単なる料理の差異ではなく、健康への意識や家族の過ごし方、学校生活の雰囲気、人との距離感といった生活全体に深く関わっていることを学んだ。今回の経験を今後の生活や学びに生かし、異なる文化を理解し尊重できる人になりたいと考えている。

・自然と人工物が共存する街の姿に深い印象を受けた。高床式で風通しの良い住居や、日差しを生かして照明に頼らない生活などから、ハワイの地域性とその魅力を実感するとともに、ワイパフ高校の生徒の積極的な姿勢から、英語をさらに学び、また留学したいという前向きな気持ちをもつことができた。

・事前課題として調べ学習を行った真珠湾を訪れることができず、学習と体験を十分に結び付けられなかったことから、歴史を本当に理解するには事前学習と現地体験の両方が不可欠であることを実感した。完璧な英語よりも「伝えようとする意志」が大切であることを体感した。

・ハワイの環境問題への取組をテーマに、現地で観察と聞き取りを行った。ごみの分別方法やペットボトルのリサイクル方法、また、サンゴを守るため、有害成分を含む日焼け止めの販売が禁止されていることなどから、環境保全が社会全体の意識として根付いていることを実感した。多様性を尊重する風土の中で、「自分は自分でよい」と感じられた経験も含め、環境と人の両面からハワイについて深く学ぶことができた。

・個性や自己表現を尊重するハワイの生活を通して、「違いを恐れず、受け入れること」が大切であると感じた。完璧な英語よりも伝えようとする意志がつながりを生むことを実感し、積極的にコミュニケーションを図る姿勢を養うことができた。

■ **引率教員の感想**

・生徒にとって有意義な留学となるよう、事前研修では「留学には、理想と現実のギャップがあること」を強調して説明した。改めて、生徒には、留学の現実を事前に伝えることが必要であると感じている。

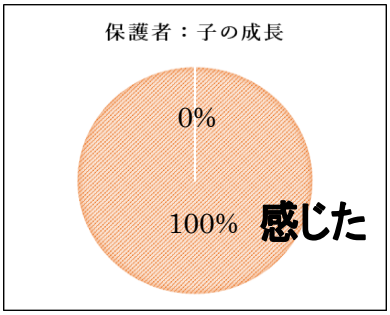
・生徒は現地で、「コミュニケーションは、英語力よりも『伝えようとする姿勢』が重要」ということを意識し、コミュニケーションをとろうとしていた。日を追うごとに表情が和らぎ、主体的な行動が見られた。

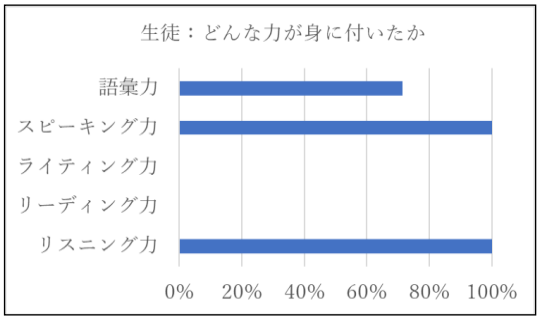
・帰国前には「将来ホストをしてみたい」と語る生徒も現れ、事業目的は概ね達成したように感じる。
・引率教員として、今後も国際交流の充実・拡大に貢献したいと思う。

ハワイ州側留学生の受入事業

■ 事業効果

受入家庭及び生徒、受入学校の双方が、本事業によるプラスの効果を感じている。特に、受入家庭の保護者からは、「英語力の向上が見られた」、「家事を手伝うようになった」や、「思いやりをもって人の世話をする姿勢が見られた」など、受入生徒に関する顕著な変化が見られたとの回答があった。





学校：学校の様子

・日本以外の文化に興味をもつ生徒が増えたと感じる。
・改めて、異文化への興味が高いという本校生徒の強みを再認識した。

■ 事業参加者の感想

✧ **受入学校**

・本校生徒は留学生に慣れており、スムーズな留学生への対応などの様子から、改めて本校生徒の強みを認識することができた。
・事業の周知及び受入家庭の応募については、PTA 国際交流委員会の保護者の方々から各学年保護者に個別に周知していただき、７家庭を揃えることができた。他国からの留学生受入業務と重なり、受入家庭先の確保に苦労したため、あらかじめ織り込んで受入業務を考えておく必要がある。
・一部教員や生徒にかかる負担がかなり大きいものの、終わってみれば学校として引き受けた意味はあったと感じる。今後は、学校全体で受け入れる体制づくりが必要になる。

✧ **受入家庭**

・留学生は、最初はとても緊張していて笑顔が少なかったけれど、徐々にコミュニケーションを取るようになり、笑顔が増えた。学校が休校になったり、繰り下げ登校があったりしてゆっくり過ごせたのは、逆によかったと思う。
・最終日、家を出る時や最後のお別れのときに見せた涙は、一生忘れることのできない瞬間となった。
・留学生との生活は、毎日が新しい発見の連続で、本当にあっという間の楽しい時間だった。一緒にご飯を食べたり、何気ない会話で笑い合ったりするうちに、いつの間にか本当の家族のような絆が生まれた気がする。当たり前の日常が、彼女の目を通してキラキラして見えたのは、私たちにとっても新鮮で貴重な経験だった。また会える日を心から楽しみにしている。

✧ **受入家庭の生徒**

・どんどん自然と口から英語が出てくるようになり、自分の変化がとても嬉しかった。
・今回の受入れは本当に良い経験になった。ハワイの文化を知ったり、英語力が身に付いたり、貴重な経験ができた。ぜひまた受け入れてみたいと思ったし、今度は自分が行く側にもなりたいと思った。
・私の友人も留学生とたくさん交流していて、留学に行ってみたいと言っている友人や、受入れをしてみたいと言っている友人もいた。